

念 腹 句 集 第二



装本 見返し 小杉放庵
花森安治

序

著者佐藤念腹君は昭和二年三月に日本を発つてブラジルに移住、開墾のかたはら虚子先生に教へられた通りに俳句をつくりつゞけること実に三十四年。その三十四年後の今年、実はかねがね虚子先生の米寿をお祝ひに日本に帰省する心づもりで準備をしたのであるが、まことに残念なことに、先生が急に亡くなられたので、お祝どころでなく、その三周忌に参ることになってしまったのである。従て、三十四年の後やうやく日本を訪れた念腹君は、神戸に船がつくと先づ直ぐに素十君に案内されて叡山の虚子塔に詣で、ついで鎌倉の寿福寺のお墓と亡き先生邸に哀しい参拝をなし、その三十四年間のことを、こまごまと虚子先生の靈前に報告するといふ次第になつた。若しも念腹君の願の如く先生が今年米寿で御健在だつたとすれば、先生はどれだけ喜ばれ且つ念腹君の労を多とされたことか、それにもまして念腹君がどれほど満足したことであらうか。思へは念腹君の折角の計画はその期待と全く裏腹の結果になつてしまつたのである。しかし、これも人生であつて、何とも致し方のないことである。念腹君は、その後今浦島の如く久々の郷里を訪ね、そして殆どひまなく全国のかねがね見たいと思つてゐたところを旅しつづけて居る。郷里の新潟県笹岡村、今は笹神村と呼ばれてゐるがその友人後輩は君の帰省をまつて各自その労力を出し合ひ、出湯といふ温泉に念腹記念の句碑を建てた。しかも念腹君は、古いホトトギスの作家であるので、中央でも地方でもいたるところで歓迎され、厚遇されなおそれは日本滞在中

つづくことであらう。

この念腹君はすでに句集を作ったのであるが、この度の帰省を機に、第一の句集、それは渡伯以前の句もすべて加へたものを作り、その大部分を、ブラジルの知友に頒つつもりであるといふ。私はその序文を頼まれた。

しかし私はこの機会に句集の句と直結した序文といふよりも、念願君の俳句の生涯のはじまりの頃のことをここに話して置きたいと思ふ。

念腹君は、虚子先生に激励され、ブラジルに写生俳句の王国をつくるのは男子の本懐である。

畠打つて詐諧国を拓くべし

虚子

ときときされた通りに、言語に絶する開拓の労苦の中にも作句を怠ることなく、しかも同志をつくりつくれて今では百五十号をこえる立派な俳句雑誌「木蔭」を発行し、その誌友も道に千を以て数ふるに至るなど、實に文字通り日本以外の外国で唯一つといふべき俳譜國をつくり上げ、しかもその俳句は虚子發生に教へられた写生、花鳥諷詠以外の何ものでもない、純粹の虚子門俳句であるから、この努力と成功は虚子發生の俳譜の歴史を語るとすれば、どうしても洩らすことの出来ない事績であると思ふ。

さういふ私の考へから、こゝに序に代へて念腹君の今日あるに至つた当初の時代のことと語り残したい。

いつか、どこかに書きもし、又人にも話したやうに、私は大正

十一年新潟医科大学の創立された年に外科の助教授として赴任したのであるが、間もなく、すでにホトトギスの読者でもあり作家でもあつた念腹君が、東京の虚子先生直門の一弟子としての私の赴任を知るや、矢も楯もたまらず、私の苗字のわからぬまゝに新潟市学校町俳人医学士みづほ様といふ、頓狂な宛名の自己紹介の手紙をくれ、それから私との俳句のつき合がはじまつたのである。それは私が三十歳、念腹君が廿五、六歳のことである。その頃、念腹君は笛岡で四十物商といつて、乾物商のやうな商店をやつて居た。もともと村の旧家で由緒ある家の裔なのであるが、巖君が政治に凝つたりして、微禄した所謂士族の商法だつたらしく、商売といふことには全然興味をもたず、専ら俳句に逃避の生活をしてゐた様である。念腹といふ雅号がおそらく日本中探しても類例のない変つた号であるごとく、念腹君には、商売に向かぬ血が流れてゐたことは少しづゝ後でわかつたのであるが、とに角俳句は減法好きで、ひまがあれば新潟の私を訪ねて來た。私は少しおくれて、同じく東大から新潟医大の内科の助教授として故浜口今夜君が來た。これも私に俳句を教へろといひ、念腹君に劣らぬ句熱心だつたのと、当時の医大の学生のうちに、鎗居春王其他、数人の熱心家があり、且つ長岡や、亀田にもすでに、笛声とか中越郎、曉華など数人の句作家が居たので、いつしか立派な俳句会が成り立つやうになり、殊に念腹君は欠席したためしのない位熱心であつた。後述木村圭石さんもそのころ吾々の仲間に加はられた。

そして、大正十三年九月十日、虚子先生を新潟に迎へ、大句会

をやり、佐藤耐雪氏を訪ねられる先生に従つて吾々も出雲崎まで行つたのであつたが、その汽車の中で、虚子先生から吾々の句会に「まはぎ会」といふ名前をいただいたので、以後一層作句に熱が入るやうになつた。

その頃の毎月の句会の記録が今も手許にあるが、そのうち大正十四年二月に私は文部省の在外研究員として欧洲に行くことになり、少し遅れて今夜君も留学するに至つて、一人とも「まはぎ会」から遠ざかつたけれども、其の間も月々の例会は熱心につづけられ、念腹君の句がホトトギスに五句ズラリとならぶといふやうなことがあつた。

然るに私どもの留守中の大正十五年八月、仲間の長老木村圭石氏が南米へ移住することになった。圭石氏は工学士でクリスチヤンで、エスペランチストであつて当時新潟で土木関係の仕事に働いて居られたのであるが、そのブラジルへ行かれる事情、念腹君もブラジルへ行くやうになつた事情などが、この「まはぎ会」の記録中にこまごまと記されてあるので、次にそれを 原文のまゝ挿し加へる。因に圭石氏は私の留守中に念腹君の結婚を媒酌されたので、圭石念腹の友交は年齢を越えて一層親密なものとなつたらしい。

留別の辞

圭石

私が南米移住を思ひ立つたのは人口問題等にて日本が行詰つたので海外發展の途を開かふ為などゝ云へば誠に立派ですが、共は

もはや我等老朽者は日本にては食ふ道がないので、どうにか食べて丈はいける様なのでさてこそ奮発した次第です。唯心細くなつて来たのは広漠な原始林へ這入り込み見るべき風物もなき移民地に在て何の樂しむべきものあるか。第一日本に残して行く演劇音楽その他の文芸にも未練あり。歌舞伎座の羽左工門梅幸も見ると出来ず研精会の長唄も喜多会のお能もラヂオでさへも聴かれざるべく、漸く蓄音機位に其一端を彷彿せしむる位に過ぎざるべく全く悲しくなつて来ます。殊に折角諸兄の御指導に依て油ののつて來た私の俳句の道に於ては一層の悲哀を感じ全く斯道を捨てるに至るやと心配して居ました。然るに念腹兄が何と思つたか一所に行くと云ふので、始めは冗談かと思つて居た処いつの間にか長野へ行て土地も買ひ受けたと云ふ。一家を挙げて行かれると云ふ。コレハママア何と夢の様な又何と私に取て喜ばしい事かと大分元氣が出て来ました。唯私が急に出発する様になつたので同行が出来ないのは残念ですが止むを得ません。ここに少しく心配なのは在歐のみづほ様が念腹兄の渡航を事ばれず、大分引止勧告をして来られたそふで或は念腹兄が虜になりはせぬかと懸念しますが、しかしこ方にも荒神様がついて居るから大丈夫です。

荒神様は虚子先生です。素十様から念腹兄への事信の中に先生は「南米行大に結構、奮闘して南米に誹諧王国を建てれば本懐なるべし」と申されたとの事にて素十様も「あのような達觀せられし方は小生などの如く女々しき考はなきものの如く小生も安心申

候」とあつたそふです。此の先生の折紙つきの南米渡航には如何なみづほ様も往生なさると氣強くなりました。

海外万里の地に在ては最も待焦がれるものは知友の書信だそふです。何卒たとへ一片の俳信にてもお忘れなく古新聞や古雑誌にても時々の御消息を賜りたく宛所は

Fazenda Alianca Caixa Post
al 55 Aracatuba, L, Noroeste,
Est de São Paulo, Brasil
ニユーヨーク経由に願います。（原文のまゝ）

この文を私が読んだのは勿論帰朝後のことで、圭石氏が大正十五年夏出発、念腹一家は昭和二年三月出発、私の帰朝が五月である。二ヶ月の差で小三年間念腹君と離れたまゝ、日本とブラジルとに隔つてしまつたのである。上掲圭石氏の辞にある通り、念腹君の移住にはいろいろ事情もあらうが、せめて私が日本へ帰つてから行くなら行くとしてはどうか、出来れば思ひ留まつてはどうかといふことを歐州から念腹君に書いたのである。然るに虚子先生は前述のやうに大賛成されたので、もちろんそれがなくとも、念腹君の移住は本人の動かぬ決心であつたのであるが、私としては虚子先生もひどいといふ感をいだいたことはたしかである。

といふのは、圭石さんは工学士であり技師である。南米へ行つてもその学歴と技術で肉体労働はしなくてもやつて行ける。どんな家庭の事情か、どんな話にのつたのか、私の知つてゐる念腹君

は、店員か事務員ならば出来ても、密林と戦ひ巨木の伐載とか、開墾といふ肉体労働のみが資本たるべき移民としては、とても体の続く見込のない非力の青年であったのである。圭石さんのやうな学歴もあり技術ももつた方とちがひ、その技術で労働を避けつゝ生活するといふ期待はまづ持てなかつた。さうであるとすれば移住は大冒険といはねばならない。家業は思ほしくないにしても、日本でなら何としても別の生活の道があるのでないか。

さういう考へで、どうも一家を支へる柱としての念腹君の移民は、私には冒険過ぎるやうに思へたのであつた。おそらく圭石さんとの関係もあり、その話に魅力を感じ、その上、虚子先生からは力をつけられたので、少々無理とは思ひながら踏み切つたのではないかといふ気がして、欧洲から、とも角も少し待つたらどうだといふ手紙を出したわけであつた。しかし事情は上にのべたやうに、相当堅い決意の末のことであつた。ブラジルの土地もすでに買つたのである。圭石さんにそゝのかされたとか、虚子先生に尻を引つぱたかれたとかいふ消極的なものでないことがだんゞ明かになつた。

ところが、何といふことか、念腹君一家両親と奥さんと次々弟らがブラジルに着いて間もなく辺境の移住地に向ふ途中、一番頼りになる労働力をもつた弟が不慮の災害で若い命を落したといふ一大不幸の報が伝はつて泉た。やはりいけなかつた。行くべきではなかつたのだと私は再び暗澹とした。虚子先生をさへ恨みに

思つた。しかし何もかもあとの祭である。

今になつて、帰つて來た念腹君に聞くところによると、さういふ肉親の不幸はあつたけれども、開墾地へ着くと、先着の圭石さんはすでに知友と語らひ念腹君の到着を歓迎し、同好者をもつて句会もやりたいと準備してゐてくれたのださうである。念腹君が背水の陣のたゞ中にあるて俳句に生きるといふ力を倍加したことは想像に難くない。以後開拓の労苦は果しなくつづいたけれども、念腹君の俳句に対する熱情はどんな苦労をも吹きとばし、続々と立派な句を虚子先生に送りつづけた。そして、子供が生まれやがて皆大きく育つて、農業牧畜といろいろの仕事に変化はありつゝもいつしか生活にも立派に安定が出来、しかも俳句の同志は殖える一方で、今ではその方で閑のない程になつたらしい。

三十四年の念腹君の生活には、そもそもその出発の当初から我々の想像も及ばぬ峻岨が現れつづけた。然るに今の念腹君はそれを少しも驚かない。いや何事にもおどろくといふことを忘れてしまつた様である。かの蒲柳の質の青年であつた念腹君は、今六十四歳といふのに五十そこそこの若い体力をもち、昔思ひもよらなかつた骨太の達しい、まことに拓士といふ名前にはぢない頑丈な人間になつて居る。驚いた。いつしかこの神経と体力が培はれ、凶太い拓士的精神が鍛へられたことは私の全く予期もしなかつたことである。

日本と夏冬が逆であつたり、風物、人情悉く俳句の作りにくいい国にゐて、しかも自分よりも優れた句作力のある仲間のないまゝ

に、三十年も四十年も不撓不屈花鳥諷詠を守りつづけることの出来た意力と体力。虚子先生にも強い血が流れてゐたので、或は三十歳のひ弱な念腹君の内に既にこの強固な素質の将来を予見され、この男ならやると見ぬかれたのか、私は今更ながら全く兜をぬがねばならなかつた。

今ブラジルには前述の通り念腹門下は千を越ゆる由である。そして「木蔭」によつて念腹先生を中心に盛に純粹な写生句にはげんでゐる。しかも念腹門下であることは一つの社会人としての誇でもあるらしい。全くもつて俳譜王国である。

そして念腹君は、ブラジルの立派な俳句王である。これからも念腹君の生のつゞく限り虚子先生の教への通りの俳句、それ以外に俳句はないといふ堅い信念はゆるぎなく後進に伝へられて行くに違ひない。

さういふわけで、この句集は念腹君自身にとつても大きな記念塔であるばかりでなく、虚子先生の俳譜歴史に於ても重要な陪史となり得るものである。

私はこの句集がブラジルに行き亘つて、ブラジルの俳句が今後益々多くなつて行くことを望むが、同時に小数は日本でも分売されると思ふから、虚子先生の大きい期待に応へて海外に俳論国を造つた一人の男の句集であるといふ意味で、一人でも多くの人に愛蔵されることもまた翼ふ次第である。

昭和三十六年八月

新潟にて 中田みづほ

序に代へて

珈琲の花明りより出でし月

念腹

白い一面の珈琲の花明り。月も亦うすうすと珈琲の花明かりを纏ふが如く。美しき春の月。

掃苔の碑に毛布巻く物語

念腹

艱難を共にした所謂爾汝の間柄の移民の友情。この二人の間には忘れる出来ない毛布の物語がある。掃苔の友の墓に毛布を巻いて昔を偲び友を思ふ。

心無く手をかざし見し凶作地

念腹

自分も凶作の苦い経験は度々なめてゐる。然るに今この凶作地に立つて、恰も他人事の如く手をかざして眺めたといふのは、如何にもはしたなき心無き業であつたと、己れを顧み己れに恥づる作者の謙虚なる心。

自省、謙虚は俳句の指導者として欠くことの出来ぬ資格であつた。

瓢骨忌水竹居より来し手紙

二十五年はわれ等の歴史瓢骨忌

上塚瓢骨氏は第一回移民監督としてブラジルに渡り、上塚殖民地をつくり移民の父として親しまれた人。而もその瓢骨氏は念腹俳句の第一弟子であり、宮坂幾別春氏が第二弟子であるといふことを聞いてゐるが、親しかつた瓢骨の忌に水竹居から來た手紙を供へて普を偲んだといふのである。

瓢骨、水竹居両氏はもと同郷同窓、俳句の縁を以て再び昔の友情が赴り、瓢骨氏の逝去には

アマゾンに流す精靈舟哀れ

水竹居

の一句を贈つてゐる。(木蔭、一九六一年七月号、上塚瓢骨翁のこと。間崎黎。参照)

後句。瓢骨忌も二十五回忌を迎へた。その二十五年の間には世界戦争もありブラジル移民も大きな困難に逢遇した。然しながらわれ等の努力によつて徐々にこの地に確乎した地歩を得つたある。二十五年は世界にとつても一つの歴史であるが、われ等にとつてもこの二十五年は一つの歴史であった。

われ等の歴史と叙べたところに何物も怖れない作者の強い面魄

がある。

寒かりし日本の記憶薄らぎし

念腹

越後の國の寒さ、その寒さへも次第に記憶から薄れつゝあるといふ寂しさ。その寒さも亦なつかしく思ひ返されるといふ故国家郷に対する切なる思慕。

戌年の七十三の椰子帽子　念腹

椰子帽子といふ一季語によつてこの七十三歳の老移民の顰蹙たる風貌が描かれてゐる。戌年といふ故国の一語も亦この老移民の風貌を描くに欠くことは出来ない。

国境の歴史は悲し秋燈下

念腹

国境といふものに戦争はつきものである。人種宗教などの興亡と争ひ。之は人類と呼ぶものの宿命なのであらう。ブラジルと境を接するアルゼンチン、パラグワイなどもその例に洩れぬ。一旅宿の秋煙下に於る静かなるもの思ひ。或は念腹の自画像と見てもいゝ。

昭和三十六年八月二十三日 地蔵盆の前日

京都 山科 高野素十

念腹句集第二

佐藤念腹

春

珈琲の花明りより出でし月

道広く片寄り行くや花珈琲

野良戻る馬の尻より春の月

春の月行かぬは意固地なりしかや

たんぽぽや馬を下りたる身を投げて

馬つなぐ幹鳴きからむ虻の声

巣籠るや撓めし園のよき枝に

花種を蒔くや輪を画きある土に

列つくるチューリップより園を出づ

チューリップ壇を降りたる群インコ

芹の籠水を跨ぎて移しけり

芹 摘 む や 流 の 中 の 力 杭

此 の 家 に 見 し 飼 屋 の 娘 廚 の 娘

蚕 飼 女 や 今 日 暇 乞 ふ 薄 化 粧

切 菓 の 突 き 刺 す 穴 に 南 瓜 蒔 く

馬 の 背 に 並 ベ 替 ヘ つ ノ ア リ ヨ 売 る

煤 煙 の た ち こ め て 春 め く と か や

漂へる貌の投餌や水温む

菜飯炊く河港泊りの船の妻

春水を料理を運び子を抱き来

老の頬にふくみて堅しヂヤボチカバ

子女大きくなりし嬬の春の風邪

南風より強東風となりマンガ咲く

葦の雨寒しと汚れシヤツ重ね

立てかけの館にあるや春暖炉

山荘の赤きソファに客と蝶

移しき蝶の羽屑を見て花園に

すみれには蝶来ベンチは今二人

花園を飛び来て孕み猫なりし

古径は蛭の流に切れてあり

轡や 昔は畠 今牧場

轡の移りて牛も樹下に居ず

春の泥人踏まぬまゝ乾きたる

抱へ來し図書の春泥靴に無し

日本語を学ぶ亦句会春燈下

春燈下靴てらてらと客迎ふ

虹飛んで当たりし音や袋掛

枝の上に出て居る顔や袋掛

掃苔の碑に毛布巻く物語

恋をする命惜みて墓参

慌しき墓参なれども心足り

茱萸咲けどその名忘れて移民古る

春めける映画館前宵となる

朝寝して心づくしの飯につく

穴を出づ蟻土くれを抱ける蟻

地価高く借料安し薯植うる

霞みつゝ亜熱帯行く驃馬の人

春泥を来て長椅子に眠り居り

春風や濃き色塗れる靴磨

春風や子を抱く花輪抱く如く

珈琲の蕊束に畝を掃く

捨て馬の来て蕊の鳥翔たず

馬下りて三人這入る闘牛士

闘牛や柵にのぼりて憩ふ騎士

春寒き八月生れは不倖せ

麦鶴啼いて馬車着くホテルかな

池の鯉捕れずじまひの田螺和

田螺汁ビール麦藁くさくなる

帆を立てゝ浮くは田螺よ蜃蛙

夜の墾や琴弾く蛙切株に

ピツコンの他にも異人摘むらしや

陽炎うて日本の裏の開墾地

バス来れば柵なき牧に仔馬跳ね

少年の相も仔馬もよき馬車屋

堀内の耕されてゐて町古りし

耕牛の啼く時口輪とりにけり

開墾に割けたるシャツや雛合

雛合せ恥をさらしに來し如し

鳥雲に田舎のバスの發つ支度

鳥雲に行く牧場主来る耕主

親仔牛五頭の旅に後ろ東風

親の尾が仔馬の貌に丸かぶり

屋根替や鳥の古巣の一ト俵

墾屋にも煤垂れ初めぬ干鱈吊る

転耕車休めば寄り来道の山羊

転耕地近しや森の雨太き

親鳥のゆさぶる枝へ巣立ちけり

喜びの胸抱く裸像春の芝

店に向く鋪道のベンチ木の芽吹く

夕燕邦人の店又見かけ

銃先に春の月出づタツー狩

牧牛を集めし上の春の月

春燈や菓子をつまめば犬見上げ

春愁の妻日記書く夜半かな

雑粥を炊くとき貧しわが塾屋

春窮や買ひ手もつかぬ古耕車

蠅生る野路歯をむいて犬通る

荷を重く人来る道の猫の恋

草闘牛今日灰色の印度牛

濯ぎ女や流掬ぶは鬪牛士

朝東風に野良を急ぐや馬並めて

綱つけて牛曳ける騎馬霞み行く

蝶々やオルガン弾ける牧の家

春の風この国の老杖もたず

初蝶や燕を描きし路地の壁

初燕 燕の町の塔かすめ

花 大根牛曳いてわれ今農夫

大根の花に二世ら四十過ぎ

春愁の妻に飯炊く夕来し

朧夜の塙にも情ふれて行く

ものの芽の一つひとつに蠅とまり

草摘みて草食む馬の前に又

樂器の樹香水の樹や樹木の日

菊根分手伝ひ好きな異人婆

蝶々や二階造りの大鶏舎

春暁の鶏三階の鶏舎に満つ

野遊や仔牛と組んで土手を落つ

野火明り丘のコロニヤ四五戸づゝ

春水に流るる森の大芥

春の風 大王椰子の張りし葉に

啓蟄の土に挿したる造花かな

大根の木が倒れ蛇穴を出づ

家長たるわが愚かさよ転耕す

罵られつゝ遅れつゝ畑打つ

種深く蒔いて川辺の鳥を追ふ

種痘待つ路辺の山羊鬚草に掛け

種痘子の泣けば悲しむ連れの犬

白き馬ありふれて古草食める

夏

水牛を鞭つしぶき上りけり

船着きし島の向ふの夏の海

旋風のあといつまでもマンガ落つ

トマテ畠畝を違へて訪ね来し

虹の戸に夕餉一皿持ちて食ふ

羽蟻翔つのらくらと野良戻り来る

汗入れてから鍬いらぬ小手伝

汗の顔光るニグロと黄昏るゝ

木蔭人羽叩く如く立ち出でし

木蔭山羊騎士も斯くやと角合せ

睡蓮の岸の木蔭の乞食かな

はつきりと道違へしよ日車草

着く汽車に人走り入る雨期の宿

大喜雨を納屋に戻つて居られしと

門までの主客に走る蜥蜴かな

人居らぬ木蔭に重ねある荷物

街頭に出会ひし妻とビール飲む

掛け声を立てつゝビール抜き廻る

氷盛る盤の外に蟹這へる

東蟹の山ゐざり合ひ石畳

夏山の邦人茶屋の物語

邦人の居らぬ地は無し夏野茶屋

牧牛の名を呼びながら帰省せる

病牛の長らへて居し帰省かな

夏園や紺青の孔雀緋のアララ

立てゝ研ぐ芝刈鎌の刃わたりよ

寝まらんと云ひて別れて外寝する

日焼して互に帰り惜み居り

国涼し親しみつゝもボ語知らず

腹黒く思ひ思はれ初笑

花椰子やぶつ違ひ立つ円柱

金魚玉インコの円き籠と吊る

青嵐息を止めつゝ牛迫へる

青嵐牛飼やめて馬も飼はず

ハンモック章魚の木の根に吊り並べ

蟹舟の今あげし網蟹居たり

ジヤツカもぐ再び霧に見失ひ

椰子の実とバナナの中のジヤツカ買ふ

夏服の移民と出合ふリオ市中

窓開けて寝につくリオも夜の秋

衰へし蚊火に人来て用急ぐ

なめくじの戸を晴々と今朝出づる

筈の夜明けに動く事知れり

メロン買ふ時片仮名を思ひけり

朝より入りて籠編む大木蔭

綠蔭に力ナリヤの籠吊りて読む

翔ち上る蝶に毒をもぎ移り

畑西瓜十本の蔓しがらめる

蜥蜴飛ぶパンペの草は藻に似たり

飛ぶ蜥蜴迫ふにあらねど馬に鞭

古き町の古き木蔭に立寄れる

美しと見し此の町の人涼し

幌日除崖にはりつく四階建て

冷蔵庫欲しと思ひし時も過ぎ

長汀のバスのあとより涼み馬車

泳ぎ場に飛び來し毯を蹴返せる

滝水の流と競ひ汽車下る

此の滝の町の流の皆迅し

初ミサをさして野路行き町を行く

野良戻る夫婦彼方の喜雨の家

雲の峯大河の彼方橋架かり

州道か土地壳道か飛ぶ蜥蜴

濯ぎ女は舶子らの妻か月見草

刺しもする河港の宿の燈蛾かな

裸子の行く街路樹のけんぼ梨

山の影野路の西日を隔てたる

庭に水やれば裸に蝶あたる

燃えつかぬ風呂の煙の夏の月

虹痒し野良靴を踏み鳴らし去る

おこり病むわが家の土間をいかに見ん

蝶の夫青葉の上に降りて待つ

飴色の肌をぬぎたる新樹かな

蔓ばらをくゝる露台の円柱

ばら垣に角ふり立てゝ放れ牛

蚤飛んで邦字新聞記者泊る

まだきより草取つて午後出勤す

夏山家客の散歩に猫ついて

螢火や客送る人垣に寄り

夏野路の犬よ屈みて体搔く

茂る草食べあきて綱長き山羊

夕焼けて今も悲しき奴隸小屋

山人の背の汗拭くを待つて聞く

ビヤホール片腕なくてよき男

夜雨の音かなしとて 酌むビールかな

アカシヤを探ねて憩ふ園木蔭

夏芒刈つて小公園手入

梅雨の月 章魚木の足宙ぶらりん

十二時の夜の鋪道の藤椅子かな

長き身を折りて藻にのり熱帶魚

鎧着て藻にぶらさがる熱帶魚

菅笠に似し椰子帽子草を刈る

戌年の七十三の椰子帽子

初夢や牧牛を追ふ若きわれ

虹の野や空^ヲの汽車行くこの時刻

夜の花昼咲いて園梅雨あがる

首を背に畳みし駝鳥檻の梅雨

夏園の大王椰子の一ト木立

夏園や大王椰子の男ぶり

西瓜買うて夜の船を待つ河港かな

道ばたの家の娼婦は跣足なる

盆踊を嫌ふ二世とビール酌む

コロニヤの娘すがたの夕涼み

園の芥子 神父聖書を見つゝ過ぐ

朝蔭の散髪垣に鏡のせ

草清水道をゆづらぬ放れ馬

病む馬に草の尺蝮這ひ移り

アリアンサ味噌煮つまりし茄子汁

吊床に夜の川見ゆる泊りかな

行水をさせたる末子抱いて寝る

寝台に寝莫蘿の巾が余るとて

妻のせし馬首初ミサに向けにけり

開墾の昔初夢にも悲し

ベランダの卓の晩夏の花は何

欠け瓶にコツボデレーテ活けてよし

金魚池囲みて植木鉢の木々

熱帶魚參観帳に署名する

還暦の移民自祝の鮓作る

喜雨祝ふ人々を舐め廻る犬

毛虫焼く腕もぎとりし如き枝

毛虫焼く妻の火の竿荒々し

自動車を拭き汗を拭き街路樹下

鉱山町や自転車に憑く蚊喰鳥

夕涼の鼓笛の稽古街路(ルア)を出づ

雨を乞ふ子供ばかりの列なりし

浜木棉に流人の如く草履捨つ

夏服や唇赤く色白く

秋

穴まどひ打つべきかとて返りみぬ

鰯雲驀進の汽車しざる馬車

馬肥えぬ夜目にも漆光りして

音もなく従き来し牧馬肥えにけり

藁塚に寝て吠ゆ犬に父帰る

嫁貰ひ藁塚がくれ来て居りぬ

棉摘や籠あける間も惜みつゝ

わが膝に彼のこぼせし夜食かな

鶴来る牧場の湖に舞ひもして

泳ぎ入りし秋の大河の犬を呼ぶ

霧飛ぶや海なく山なき移民の地

人の名の移民の町よ天の川

薬掘る病める頭に布巻いて

伐る竹にまた後しがる立話

澄む水に屈めば人と居る如し

竹春や富めば長生きする移民

散らばつて城址を見るや草の花

ベンチの子眠れるを見て柿食へる

影法師わが門に伸び月を来る

月を待つ馬つなぎ替へ鞭下ろし

秋草の萩の如きを牛食める

柵に依る牛草の穂に透ける牛

啄木鳥の音飛び違ひつゝ明けぬ

啄木鳥のこだま棹さす水にあり

新藁を負うて一人は早戻り

牧場より馬車戻るまで木諸掘る

土産物買ふ物も無く柿を買ふ

寒かりし旅を戻りて冬支度

鰯雲わが生立と違ふ町

ボ語とは又異なる会話走馬燈

街路樹の木の実食はれもするといふ

園の鹿造りし岩の古びやう

薄黒き塩の山吹く秋の風

夜食中賃錢貰ふ名を呼ばれ

古都の人虫を聞きゐて親切に

長き夜の貧しき家に人寄れる

天の川道連れもなく村を過ぎ

天の川何処にあれど老ゆのみぞ

心無く手をかざし見し凶作地

嵩高に何積む馬車よ凶作地

慰めの言葉は悲し秋の風

わが敵か味方か月に立話

嘴の木の実をはさむ隙間かな

唐黍を噛む緋アララの黒き舌

豚飼のコスモス折るゝ詮もなし

鶏頭や水やれば赤くなる土に

夜学師のバス下りし手に接吻す

夜学子の照らし出されて端麗に

霧こめし階段口の靴磨き

うづくまる乞食の前を霧に行く

豊年の村の乙女の名はマリヤ

諸穫りしわれ豆植ゑし彼と酌む

乗馬肥えて疊の上を行く如し

放れ馬肥えてポン屋の前に居り

国境の歴史は悲し秋燈下

珈琲の国の奥地の稻の秋

仲悪しき二人夜業に残りしと

豊年も火酒ならざれば醉出でず

酒氣ありて馬に乗り居り菊の主

枝豆に尊き方の頬笑みぬ

足音に鯉はねて寄る廊の秋

わが庭のパンパ芒の月の雨

ぶつきりの魚買ひ迷ひ鰯買ふ

深秋の青物市に小鳥買ふ

秋の山後ろに巨船入港す

夕露や幌馬車宿の馬五匹

芋の葉をふちどる露の粒々よ

芋の露微塵の中の玉一つ

墾屋とは仮屋の仮屋小望月

ボテキンに火酒飲み去るや小望月

鷹揚にニグロうなづき柿を摘む

摘棉を秤りて曲りたる庭木

悲しめる人の影寄る受難節

わが町の貧しき人等ユダを打つ

パイネーラの落花搔きては大根蒔く

芋がらを土間に投げ捨て妻疲れ

木の実降る山家に職を求め行く

腰かけし尻を刺せしも草虱

馬肥えて耕主も肥えて憎々し

夜寒はや外套を着て老移民

客が弾く店のピアノや鰯雲

カニバルの曲われ去ればみだらなる

夜の鳥か鹿の声かと火酒に酔ふ

此の鹿ももとより啼かず園大樹

此の町の夕月夜大エスの像

ロータリー俱樂部例会ビルの月

露しとゞ芥火燃ゆる草の中

秋草のファゼンデーロといふ花も

秋茄子焼いて夜となる墾の飯

土間の鞍壁の角笛月さして

渡り鳥仰げば馬も立どまり

冬

熱燭や鞆の金を分けてやる

冬灯虎髭立てゝほしいまゝ

障子開けて冬の紅葉に間に合ひし

戻り来て用事なかりし毛糸編む

トラックより下ろす太鼓や労働祭

船火事の燃えて離るゝボートかな

水鳥に人影のなき蒸汽航く

寒釣に貸して休めり河蒸汽

人の如起きあがる槇割りにけり

野良の靴脱がせて貰ふ風邪寝かな

瓢骨忌瓢骨会といふ句会

瓢骨忌水竹居より來し葉書

頂に牛現はれて牧枯るゝ

落葉踏む馬足音もなく老いし

鹿壳の顎をしゃくつて負け呉れぬ

兎汁嗜み出せしもの炉にくべる

狐火や酒飲んでゐて遅くなり

狐火の映るわれ等の革衣

狩の弾惜みて進む山深し

立てかけし戸に吊る銃や狩の宿

切株の燃えて崖落つ焚火かな

股火鉢して道焚火見て居りぬ

臼逃げし子等に味噌搗き杵あがる

飯食うて来て力あり根木打

鷄の減りて見に行く狐罠

狐奴と罵りし夜の罠かゝる

赤き馬車尾立狐と暮れにけり

借となる物々交換の鴨一羽

夜の霜歩道にのりて寝るジープ

枯園や侍りて赤きジープの輪

冬の雨はげし樹海の町なれば

冬雨の降るより居らぬ野良の人

炭負うて余りに日本移民らし

隻眼の移民に青し冬の草

柔かに指噛んではやインコ慣れ

葛絡む崖に鷹居し樹海中

熟爛も移民の宿も彼好かず

熟爛や雑誌で卓の上を掃き

汽車を見ぬ三十年や茎漬くる

店しめてたくあん漬くる夜更かな

仲悪しき夫婦それぞれ春を待つ

牧牛の子を産み出せし春を待つ

冬ざれや吾起てば彼石に掛け

日向ぼこして悲しめるわが生活

玉子酒顔に血にじみ痛くなし

悴める如き手足を診察す

隙間風涼しかれとて建てし家

青年を懸菜の下に待つ乙女

眠り木兎檻に覚め木兎園の木に

三日月の鸚鵡の眉を君知るや

畦みちの落葉さらへしつむじかな

わだかまる枯蔓にのり木を伐れる

会終る日脚伸びたる階の上に

冬服の日本座敷の女客

目覚ましのラジオに咳をして起きる

乳しほる牛ら咳して曉待てる

シユラスコや少年馬に寝呆け乗る

馬上の妻抱き下ろしてシユラスコに

群オーム翔ち去りし木の飼オーム

此の町のサントの供物盗るアララ

芭蕉枯る丈なす草ともたれ合ひ

雨侘びし風寒しとて芭蕉枯る

われと妻行く間をよぎる時雨人

頬被二世の母は皆老いて

大南風夜となる家に犬戻る

木の葉散る影われを越す月夜かな

玻璃戸より見し霜窓を開けし霜

霜ふりて悲しき村となるばかり

板床を歩める靴に炭つぶれ

葱買ひしあと駆け去りし野菜馬車

冬木立投資と云へば土地を買ひ

狐色して丈高き草枯るゝ

牡蠣むいてリオの女は色黒き

牡蠣をむくナイフ指さすリオの地図

冬休無帽のためか日焼せる

寒かりし日本の記憶薄らぎし

毛皮着て戻り頬冠して戻り

酒飲みて飯食はぬ日の根深汁

一軒家の焚火祭の大家族

マストロの竿秀でたる冬構

小春人道曲りわれ道違へ

日向ぼこ飛機の音また樹にかくれ

牛は牧に驃馬は戸口に山眠る

山眠る茶屋の貰ひ子日本人

夕空に残り枯野に無き日かな

禿鷹や移民ゆかりの古き塔

冬晴の船に乗る椰子帽子買ふ

南聖や冬も跣足の莫蘆織女

山伐りのひとり打つ斧力あり

ニグロの子今日も裸や冬耕す

吹きつけて墾屋焼く如焚火燃ゆ

味噌搗くや庭をならして臼を据え

迫ひつきし騎馬榦なりし虎落笛

ボテキンに寄りてギタ弾く狩人ら

身震ひをする炭馬に舟發てり

バルサ待つ焚火に馬を乗りつけし

ひとり子のもたるる壁の日脚伸ぶ

枯芝に聖像寝かせ園修理

熟欄の猪口かほどまで小かりしや

煮擬やリオ曇とて昨日今日

梟や道曲のごと牧扉

切株にのりて狐火拡ごりぬ

捨て馬を手なづけてをり大根引

水飲みに來し牛落葉舐めても見

冬ぬくし十五日目で大仔牛

ブラジルの薄紫となる冬菜

毛布の値つき出してある通りかな

古毛布物価の安き頃のこと

壺を頭に娘ら行く方や珈琲摘む

汽車を見る子の寒き日も馬柵にのり

二十五年はわれ等の歴史瓢骨忌

バイナ飛ぶ中流といふ暮し無く

山眠り面影もなく移民老い

山眠り里人も旅人も驟馬

越後 笹岡

(天正十年—昭和年三月)

海苔舟や相傾けて搔き競ふ

燃えてゐる大枝もてり野焼人

居合せてかけ手伝ひぬ涅槃像

生欠伸噛み殺したる日永僧

帆の尾の上り糲穀こぼしつゝ

崖藤に仰向き漕げるボートかな

朧月提灯あればあるでよし

承塵(なげし)なる檜蘿刀や花の宿

春水や船の流せし料理屑

連峯の中の故山やいかのぼり

東風の戸や鳴り静まりて女夫鈴

東風吹くや師匠が門の立話

新参を娘と思はゞや年頃も

初午や堂に這入りてお世話人

捕へたる枝をひっぱり桑を摘む

畠打や笠ほどばしる雨となり

土手裏にあがる鋤かな田を打てる

とばつちり噛みて耕馬を罵れり

雨濡れに精根のれる田打かな

花時を馬に蹴られて臥するとは

母の忌や勘当許りて春の炉に

提灯によけゐし犬や雪解道

妻伴れし酒の機嫌や雪解道

落椿押し出したる門扉かな

東風の波たゞみ入るなり松の陰

夫が焼く土手の煙や昼餉時

老の杖互によけて撲つ鶏よ

雨そゝぐ盤石這へり藤の池

耕牛やはるかにありてとゞまらず

一人づゝ風に耐へ打つ棚田かな

田一枚隔り顔や田搔牛

畦塗りに夕騒ぎせる田水かな

塗り畦の息吹き乾く天気かな

塗り畦の上なる笠や去に仕度

道々もさとされながら出代りぬ

鉢かたげ午餉戻りや彼岸の入り

土手裏に一筋張れり凧の糸
夜ざくらの袖曳き枝やふりかへる

崖藤に馬車つきあたり鞭あぐる

御輿下くゞれよ病児もう一度

母校今は村役場なり桐の花

一つ餌に二つ逆立つ金魚かな

聞法の扇の中を来て座る

芦切や万代橋の人通り

芦切や背の短冊汗ばまん

西瓜壳上り框に腹這ひし

踊りつゝ見やりし月の波頭

海女が子の叱られ逃げて泳ぎけり

早乙女のうち連れわたる俵堰

白扇や木の間にも居る会葬者

地蔵会や通して貰ふ夜の荷馬車

楽人へあほぐ団扇や柱陰

これやこの永久の盲や団扇風

勝馬に従いて走りて帰る子等

帰省子を待ちあぐみ寝しところとて

瓜番や仮寝の肱へ月さして

螢火の降り落されぬ笠の上

河骨や馬乗り入れてさかのぼり

もたせある笠かむり出ぬ蟬時雨

畦々やくり出したる早苗取

流木の山とりまける月見草

兵士ゐる信濃の奥の梅雨の駅

土手裏に行軍休む夜水番

こそりともさせずに野良へ昼寝起

足裏に跣足こすりて話しけり

土けむりかむる一騎やくらべ馬

雁を見るに上目遣ひや葬人

庵の秋はめて障子の歪みかな

萩の花客送る灯をかゝげけり

新米やたまく帰る休暇兵

物言へば潤む眼や老の秋

秋の蚊に立てゝ香りぬ蚊遣香

かけてやる背の合羽や秋の雨

仰向いて荷車曳きぬ雁の棹

秋晴や訪へば居りたる二階人

乗叩く竿枝を打ち葉を散らし

納屋の戸の倒れ合ひたる野分かな

釣橋の一線ありぬ萩の中

軒下に寄りても行くや天の川

鷦高音沼にうつれる枝を得て

くら闇に友犬居りぬ月の門

まのあたり一葉の欠けし明るさよ

稻刈るや夜明けはなれて彼方にも

稻運ぶ今日もおつつけ十車

なげしなる提灯貸しぬ紅葉宿

たきかけし松茸飯を待つ我等

物乞の秋の扇をひろげけり

萱刈の刈あらはれぬ谷向ひ

渡り鳥押し返すなり庵の上

ふたゝびの行手の雁や佐渡巡り

廻守るあまり静けく空仰ぎ

古酒の壺筵にとんと置き据ゑぬ

秋暑き広場よぎりぬ工夫長

泉井や花火明りの絶間なく

草むらに提灯明き墓参かな

門火焚く出て来し尉をふり返り

石垣や釣り代り居る沙魚日和

稻雀下りて畦色かはりたる

引つれて立つ鳥もなき鳴子かな

遠鳴子拍子ぬけして立つ鳥よ

鮭舟や二手に綱を張り下る

払ひ合ふ雪の合羽や針子達

雪沓や提灯持ちて先だつ子

相棒の腹ごしらへや櫻の宿

入営の雪暁の花火かな

藁苞の鷄逃がしたる札者かな

年玉を商ひながら配りけり

鶏の毛を筆りゐる布子かな

何を蒔く畝作りたる冬田かな

筵戸の濡れこはゞりぬ冬の雨

炉の嫗人見逮ひて語らへる

追ひかけて布施を渡しぬ寒念佛

枯藪にひつかけ干せるもんぺかな

笪啼や飯櫃負うて杣が妻

わけてやる炭をつぎ置き兄書生
此櫂のあとに従き行くことにする

雪沓の解け緒結べる前の僧

スケートや連峯我につきめぐる

渡舟下りて宿るばかりよ浮寝鳥

老が身のなぐさみ店や早炬燵

旅人の詣で交じりぬ神無月

帰山して焚火の輪にも見えられし

縁にある死人の湯婆おそれけり

風あたりさこそや丘の干菜宿

餅搗きの湯気をかむりて掛けへる

雑煮腹餓鬼の腹とも云ふべかり

豆撒や雪沓穿いて蔵々に

木洩れ日 のとみに夕づき落葉搔

竹馬や股間に犬を従へる

鴨撃ちに今出し父や銃の音

畦道や呼び戻されて狩の犬

道の犬来て逞しき焚火かな

焚火の輪後ろの櫈に雪ふれる

てらてらと炭とりの柄の手ずれかな

入日の日ざしてくらし布団蔵

山下りて時雨るゝ納屋へ戻りけり

茎の石押し屈み居て話す妻

月の人居櫛を従け来ぬ蓑陰に

たゞ人の提灯従けり寒念佛

提灯をうつ雪もなく積りけり

番犬や夜半の櫻駄け過ぎしのみ

蓑笠に忽ち積る雪を搔く

蓑払ふ袖におつなり笠の雪

おろしたる枝へのりおつ年木樵

年木樵る斜たほれて屏風岩

犬つれて出づるともなし霜の門

一々の穴に物云ひ施行かな

掛乞にかまはず藁を打はじむ

跋

虚子先生がホトトギス雑詠の選をやめてから、亡くなられる迄の七、八年間に、特に乞うて見て頂いた拙句が三百余りある。今度四年ぶりにブラジルから帰つて、叡山の虚子塔に詣で、鎌倉の虚子忌に参じた時に、此の事を思ひ出し、比の虚子選を根幹として一冊にしておきたいと思つた。

又、三十四年ぶりに越後筈岡の土を踏み、故郷の俳人連に温かく迎へられた時に、私がブラジルに渡る前に作った筈岡の句で、虚子選をへたものが百句余りあることを思ひ出し、これも一冊のうちにおさめて置きたいと思つた。

昭和二十七年刊行の念腹句集は、ブラジル渡航の昭和二年三月から、一九三六年十一月までの句を収録したものであつたが、今度の句集はそれに次ぐ、昭和二十七年一月より三十五年十二月迄の四百五十四句を収録した。

昭和二十九年九月に、住み馴れた奥地のアリアンサから、バウルー市に移住した。バウルーはサンパウロ州の真中に位する地方都市なので、子等の勉学と俳句活動の便利を考へての事であつた。此の句集の大部分の句は、此處を根城として作られたものである。

前述の越後筈岡で作った、ブラジル渡航前の句は附録としておさめた。これは大正十年から昭和二年三月までのものであつて、今にしてみれば随分幼稚な句、乱暴な句も目につくが、其の頃の思ひ出に繋が

るものは残しのこしたら百四十九句となつた。故に本集はさきの念腹句集に次ぐものであるけれども、此の附録に限り、念腹句集に先立つものとなる。

中田みづほ先生と高野素十先生は、虚子先生に次いで大切な私の師匠であるので、それぞれに序文を乞ひ、その上に虚子選以外の句の校閲を願つた。装画は小杉放庵先生を煩わした。これは家田小刀子氏の友情深き仲介に拠るものである。

此の他、此のさゝやかな句集の上梓に当つて力添へ下すつた、宮坂幾別春、荒垣冬虚の両氏、ならびに暮しの手帖社の方々に深く感謝の意を表する。

昭和三十六年八月二十日

東京神田駿河台朝き里にて 佐 藤 念 腹

念腹句集第二 定価四百五十円

昭和参拾六年拾月拾五日印刷 昭和参拾六年拾壹月壹日発行

著者 佐藤念腹

発行者 大橋鎮子 東京都中央区銀座西八丁目五番地

発行所 暮しの手帖社 東京都中央区銀座西八丁目五番地

印刷者 青山与三次郎 東京都港区芝愛宕町武丁目八五番地

印刷所 青山印刷株式会社 東京都港区芝愛宕町武丁目八五番地